

# 令和4年度 日本精神科医学会学術教育研修会 報告

## 作業療法士部門

遠藤 謙二 鶴岡 義明

令和4年度日本精神科医学会学術教育研修会作業療法士部門は「進化を止めない作業療法～作業療法の今を考える・将来を見据える～」をテーマに、令和4年6月4日（土）、学術研修分科会の担当でZoom（日精協会館）を使用して開催し、90名が参加した。

最初の講演は「精神科医療の将来展望」と題して山崎學會長が講演された。精神保健行政の歴史を振り返り、治療法の開発経過、諸外国と日本の閉鎖処遇の考え方や定義の違いなどを分かりやすく解説された。また、海外と日本の精神病床などの定義の違いを説明されて精神科病院の社会的偏見につながりかねない公表されているデータの正しい読み方についても解説をされた。

引き続き坪井重博先生（豊田西病院）により「今後、作業療法士へ期待すること」と題して医師の立場から作業療法士へ期待することについての講演が行われた。最初に作業療法の背景と現状について述べられ、作業療法へのニーズと多様化に対応する必要性を強調された。また、自院で行われている外来作業療法と入院作業療法のプログラムを説明され、入院OTから通院OTへつながる工夫や作業療法士と看護師の2名体制で行う就労支援・外来リラクゼーション教室・OTフィットネスを紹介され、今研修会のテーマであるまさに進化を止めない作業療法について説明をされ、最後に作業療法士ならではの創意工夫をこれからも期待していると締めくくった。

午後の最初の講演は、青山幸広先生（ケアプロ

デューズRX組）による「作業療法のヒント」と題した講演と実技が行われた。講演では最初に介護の三原則、①寝たきりにしない・させない、②主体性・個性を引き出す、③生活習慣を守る、の三点を挙げた。さらに生活習慣を守る、では、セルフケア・家事・仕事・余暇・地域活動を大切にしたい9カ条を挙げて生活習慣を変えないことが元気になる秘訣であると説いた。また、解決志向（ソリューション・フォーカス）に立った介護観を説明され、違う視点から問題解決を図ることで結果的に問題解決に至り、介護から普通の生活に変わった実例を紹介された。実技ではすぐにできるものから多少練習が必要なテクニックまで披露をされて、介護される側がストレスを感じない実技を教えていただいた。

最後に吉満孝二先生（鹿児島大学医学部保健学科作業療法学専攻）が「作業療法へのロボット・AIの活用と今後の可能性について」と題して今後の作業療法の現場へのロボット・AIの活用について話され、介護報酬改定から見た介護現場が解決すべき課題について介護ロボットの導入事例やアプリを使用した課題解決方法が示された。介護ロボット導入に当たっては、対象者・目的・効果について確認・検討をすることも強調された。医療介護は人手不足で現場が疲弊している所が多く、さらにコロナ禍に端を発したパラダイムシフトで作業療法士はどう生き残れるか、生き抜くためには国の施策に注目をしてデジタル化の情報収集をすることの重要性を説いて締めくくられた。

今研修会の副題は「作業療法の今を考える・将来を見据える」だが副題の通り、作業療法の今と将来について考える機会となった研修会であった。講師の皆様には大変貴重な講演をしていただき感謝を申し上げます。

（日本精神科医学会  
学術教育推進制度学術研修分科会）